



TITLE:

人文 第10号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第10号. 人文 1974, 10: 1-32

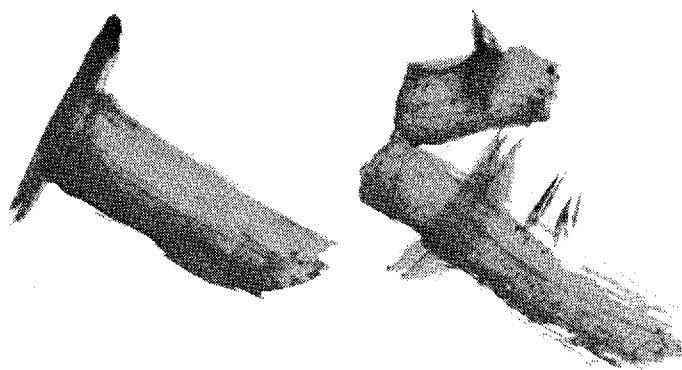
ISSUE DATE:

1974-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57136>

RIGHT:

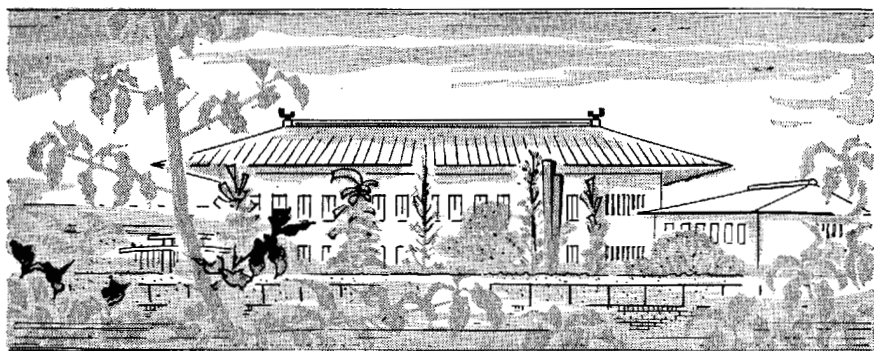


第一〇号



1974

京都大学人文科学研究所



人 文 第一〇号

1973年9月—1974年2月

も く じ

わたしの考え	河野 健二	2
任期を了えて		
講演		
開所記念講演		4
翻訳論—借用語と逐語訳	野村 雅一	
文革後の中国文学	竹内 実	
現代の相統問題	太田 武男	
書評		9
渡部徹・飛鳥井雅道編『日本社会主義運動史論』（小野）／林屋辰三郎『古代中世芸術論』（小南）／山下正男『動物と西洋思想』（飛鳥井）／川勝義雄『史学論集』（中村）／京都大学人類学研究会編『目で見える人類学』（吉田）／飛鳥井雅道『日本近代の出版』（樋口）／荒井健『杜牧』（飯沼）／河野健二『中国紀行30日』（竹内）		
共同研究のうきき		17
五年目を迎えて	林 已奈夫	
知識人ジョフレ・リュデル	樺山 紘一	
「敦煌研究」専号第二の計画	藤枝 晃	
研究ノート		21
雲岡十八洞測量図仕末記	田中 重雄	
学問と日常生活	松原 正毅	
『維新土佐勤王史』のこと	飛鳥井雅道	
旅（テキサス談）	島田 虔次	
書いたもの一覧（一九七三年九月—一九七四年二月）		27
おくりもの（人文科学協会助成金（×8）・所員へのアンケート（16）外国人研修員（20）『人文』一〇号の辞（26）		

任期を了えて

河 野 健 二

所長退任の弁を書けといわれて、考えているところへ、私にとっての同学の畏友、内田義彦氏から『学問への散策』と題する近刊が贈られてきた。ページを繰っていると、学問論はもとより、新劇について、音楽について、小説について自由自在に論じたエッセイ集である。「社会科学者もエッセイとして通用するものを書かんといかん」という気持ちをこめて、この本を作った」と「あとがき」に述べている。

「学問への散策」というタイトルを見て、「うまい題だな」と思う一方、この四年間、「学問への散策」を怠ってきた自分のことが急に気になった。研究所の所長という仕事は「学問への散策」どころか「世俗への没頭」ともいうべきもので、連日のような会議や、予算獲得のための陳情、諸団体との折衝、複雑な人事問題など、学問の土台作りといえば体裁はよいが、実際は雑務の連続でしかない。四年間に残した書きものといえば、内田氏のような品度の高いエッセイとは比較にならない「論壇時評」のたぐいだ

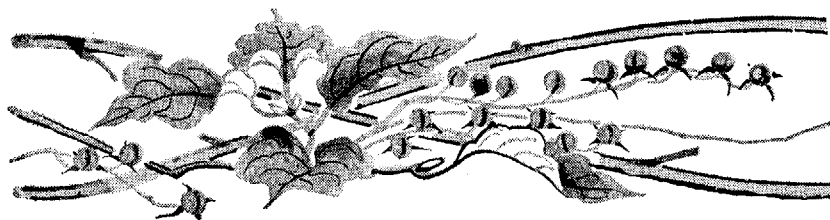


けなのは、まったく味気ない話である。

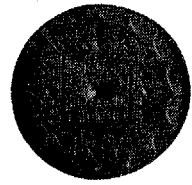
管理職といっても色々あって、学者から知事になるようなケースでは、三選や四選どころか七選までやろうというファイトが出るものらしいが、自分を研究者だと思っているかぎり、研究所長のような仕事は短かいほうがよい。所長として残した仕事というものは、あっても仕方がないものだし、また誰れがやっても変りばえしないものだからである。

しかし、所長としての私は恵まれていたと思う。所長になると学内外の他の研究所長たちと接触することになり、他の研究所長たちが紛争の後遺症や職員問題などで深刻に悩んでいるのをしばしば見聞することができた。私の場合、研究所の内部に関するかぎり、困難な目に出会ったことは、ほとんどなかった。おそらく、研究組織にしても、事務室にしても、組合にしても、なるべく所長には問題を投げかけないでおうという配慮があったのに違いない。私のところへ提起されたときには、問題は事実上おわっていたことが多かった。

こういう所内のいたわりのおかげで、私は山積する大学全体の問題にくらか取組むことができ、また研究所長会議や文部省との関係でも研究所の業績や任務を知ってもらう上で多少の力をさくことができた。もちろん、わが人文科学研究所がわが国有数の特色ある研究所として重きをなしているのは、先学および現役の研究者の仕事の質の高さに由来するものであって、所長個人のよくするところではない。ただ、そういう背景をせおって、いたために私の仕事は極めてやりやすかったということが出来る。この点、私は幸運であった。感謝のほかはない。



講演



開所記念講演

昭和四八年十一月一九日
於 東一条・京都イタリア会館

翻訳論

借用語と逐語訳

野村雅一

翻訳の手續きとしては、借用語や逐語訳は極めて単純なものである。前者については、音韻上の適応、後者では文法的、語彙論的規範からの逸脱の度合が問題になるぐらいであろう。しかし、翻訳を文化接触という場で考えると、これらの過程の重要性がたちまち明らかになる。新たに導入された語は在来の語彙構造を変化させる可能性をはらみ、不自然な逐語訳の定着は

文法構造に影響する。これは言語の上にもたらされる結果であるが、その前提となるのは、借用語や逐語訳が文明の拡大の尖兵として働くことである。そのことは、借用語を生む次のような要因を考察することによって一層確かになる。

一、言語、というよりも文化の権威の差。

接触する諸言語、諸方言の間には言語の性格とは無関係に権威の差があるのが普通である。高い所から低い所へ語は流入する。言語間の地理的距離は二次的要因である。

二、文体上の配慮。

各言語はその語彙の間に複雑かつ独自の連想関係がある。テレビの連想クイズを外国語に訳すのは至難の業である。そのため、ある言語のAという語に、他の言語で一義的な妥当性のあるBという語をあてるよりもAをそのまま取り入れるほうが好ましい場合がある。

三、対応語が全くない外国の文物に接した場合。

この場合も、語形の直接の借用を避けようと思えば、語義の可塑性を利用して語彙を転用することができるけれども、文化のある領域に関する語彙を大量に借用したり、外国語をなぞったりするのは珍しい現象ではない。(なぞりは逐語訳の形態素レベルへの縮小版と考えられる。) 異質な文化を取り入れる時、ことばも

また新しくなければならぬのである。これが西洋文明の拡大と共に、国際共通語彙を生んだ条件である。

以上、借用語について考えた。逐語訳は、言語構造に与える影響（たとえば漢文訓読が生んだ日本語の語法）という点では異なるが、それを起す要因については借用語と同様である。一例を挙げれば、日本（そして他の多くの国）の軍隊の号令はフランス語からの逐語訳だが、それにはやはり前述の三つの要因が大きく作用している。ただ、ここでは異質な体の動きとことばが問題になるのである。そして、それは別のより根源的な間につながって行く。すなわち、本居宣長の云うところのこと（ワザ）とことばの相関にからだが加わって、あらためて人間文化の組織原理が問われるのである。

文革新後の中国文学

竹内 実

一九七三年夏ごろから、ぼつぼつと中国出版の文芸書が入手できるようになった。大学（文学部）の授業

でも、李雲徳「沸騰的群山」第二部をテキストに使用中である。わたしの考えでは、いまの中国の文学作品は、文学作品としての成熟度・完成度うんぬんを議論するよりは、社会的な資料として読んでいく立場があるのではないかとおもう。

さて、そのような立場で眺めていくと、文学作品は、文化大革命に対応するよりも、林彪批判に対応しているようである。「劉少奇のたぐいのペテン師」の「天才観」を批判する話が出てくるのが、その一例である（陳送策「一篇批判稿」「登高賞」所収、浙江人民出版社）。つまり、文革が始って、文学作品がとぎれ、また続けるようになってみると、文革以後の段階がそこに反映しているというわけである。文革がまったく出てこないというのではないが、正面から本格的にとりあげた作品は、まだない。生活のなかの些末事を描いたところに、かえって興味をひくものがある。中国の現実社会の一端をうかがうことができる。たとえば、地主分子は、豚小屋には立入禁止になっていることなど（金沙「兩個飼養員」前出書所収）。

文革以後、文学（文芸）の主流をなす「革命模範劇」についていうと、ここ一、二年、雑誌「紅旗」に発表された、革命現代京劇の作品は、つぎのとおりである。

「海港」(「紅旗」一九七二年二期)、「竜江頌」(三期)、「紅色娘子軍」(四期)、「奇襲白虎団」(十一期)、「平原作戦」(一九七三年七期)、「杜鵑山」(十期)

以上の作品のうち、とくに注目されるのは「竜江頌」である。これをとくに賞讃した丁学雷論文が、一九七二年初頭に発表され、しかも江青指導といわれる「海港」に言及していないことは、江青とは別箇に文芸創作に従事するグループが存在し、抬頭していることをものがたっている。

「竜江頌」の主人公は江水英という婦人の支部書記であるが、彼女が徹頭徹尾、大衆の利益に奉仕し、しかも人命をなげうって大衆に奉仕するのではないところに、文革以後の政治路線の反映があらわれていると考えられる。脚本発表は、毛沢東・ニクソン会見と同じ月であるが、創作に必要とする時間を考えれば、かなり以前から準備されたものでなければならぬ。社会状況としての「脱文革化」は、あまりわれわれに伝わらないが、この脚本の発表・内容からすれば、それ以前と比べて意外に大きな変化なのではないだろうか。これらの劇、およびほかの小説類にあらわれる、階級敵とされる「悪玉」は卑小であり、社会矛盾のありかたを暗示しているようにおもわれる。その矛盾は、かくれた悪人を発見し、投獄することで終っている。

現代の相続問題

——配偶者の代襲相続権の問題を中心として——

太田 武 男

一 戦後における民法の改正で、配偶者とくに妻の相続法上の地位を向上せしめたことは周知の事実である。具体的には、配偶者相続権の確立がそれである。やや詳言すれば、戦前の民法は家族制度の維持を建前とするものであったから、相続法の分野においても、縦の血統の維持が重視されていた。それゆえ、第一順位の相続人は、直系卑属であり、配偶者は、家督相続の場合にせよ、遺産相続の場合にせよ、第二順位以下におかれていた。だから、先順位者(家督相続の場合には、法定推定家督相続人たる長男、遺産相続の場合には、直系卑属のある場合には、妻は、夫の遺産を相続するには由らない状態であった(旧九七〇条・九九四条・九九六条)。しかし、戦後の改正民法は、民主的な家庭生活の維持を建前とするものであったから、家督相続制度を廃止し、遺産相続についても、その根拠としては、生前の扶養に代る死後扶養ないし無主財産の合理的分

配の觀念が強調されている。だから、同法は、配偶者は常に相続人となる旨を規定し、第一順位者たる子がある場合でも、その者と同順位において相続人となるものとし、配偶者相続権を確立し（八九〇条）、配偶者の相続法上の地位を高めた点において特徴的である。

二 それはともかく、被相続人の子が、相続の開始以前に死亡したときなどには、その者（相続人）の子すなわち被相続人の孫が、その相続人たる子に代つて相続する代襲相続の制度（八八七条）は、元來、家の制度の存在を前提とした旧法下、嫡孫承祖の思想に基因するものとして認められていた制度であつた。だから、その前提たる家の制度が廢止された新法下においては、はたしてどれだけの存在意義を認められうるのか疑問なきわけではないが、新法下では、それは代襲相続人の相続期待権の保護に役立つものとして、引続き認められている。

三 だから、新法下、代襲の場合には、その者（相続人）の子の期待もさることながら、その者の配偶者の期待は、その子に優るとも劣らない筈である。なんとすれば、現行民法のもとにおいては、もしも、被相続人の死亡当時、被相続人の子があれば、その子が相続し、つぎに、その子について相続が開始したときには、当然に、その子の配偶者が、その子の子と同順位

で相続人となる（したがって、その期待は極めて大きい）筈であるからである。それにもかかわらず、現行民法の下では、おい・めいにまで代襲相続権を認めながら（八八九条一項）、配偶者には、それを認めていない。

学界ならびに法制審議会などにおいて、昨今配偶者に代襲相続権を認むべきか否かの問題が論ぜられているのも、そのためである。積極説は、右に述べたような点を論拠として、配偶者にも代襲相続権を認むべきであると解するが、消極説は、（一）それは、妻だけの問題か、夫についても認めらるべきか。また、長男の嫁だけの問題か、二、三男の嫁についても認めらるべき問題か、（二）妻だけの問題に限るとしても、婚姻期間の長短に係はないのか、たとえば、結婚の翌日、夫（相続人）が死亡し、その後間もなく、その夫の父（被相続人）が死亡したような場合でも認めらるべきか、（三）もしも、配偶者（妻）に代襲を認めるとすれば、相続人とその配偶者との間に子がない場合において、その相続人が先に死亡し、そのあとから被相続人が死亡したときは、被相続人の妻の相続分は三分の一、その相続人の配偶者の代襲相続分は三分の二となるような不都合を生ずるが、それでもよいのかなど、問題が多い点を指摘して、配偶者に代襲相続権を認めることに難色を示しており、未だ帰趨するところを知らない状態

ある。しかし、さきに述べたような背景のもとにある現行民法の建前よりすれば、多少の制限（たとえば、相続人に子のないときに限るなどの制限）をつけるにしても、積極的に解すべきではないかと考えている。

いずれにしても、右の問題の解決は、われわれ家族法学者に課せられた重大なる課題であり、今後、十分検討を要する問題の一つたるを失わない。

おくりもの

人文科学協会助成金

この助成金は毎年若手研究者を選んでおくれるが、昭和四七年度は菅野正氏が、四八年度は楠山修作氏が選ばれた。ともに研究者としては必ずしも恵まれない環境にあって、すぐれた業績を示した篤学の士である。

菅野 正氏

菅野正氏は昭和三四年京都大学東洋史学科を卒業以来、高校教諭という多忙な職業にありながらも、一貫して中国近代史（特

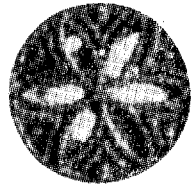
に義和團―辛亥革命、とりわけその外交史的方面）の研究に没頭し、早くからわが「辛亥革命研究班」にも参加し、「ヒストリア」「東洋史研究」その他に多くの論文を発表してきた。元来この時期の外交史的研究は我が国では、日本史畑の学者のそれが目立つのであるが、氏の研究は中国史の立場からするものである点に於て特徴を有する。特に辛亥革命班における最近の報告「辛亥革命の外交関係」は、従来未利用の外務省保管文書を利用して注目すべき新見解を提出したものであるとして、班員一同に深い感銘を与えたのであった。

楠山修作氏

楠山修作氏は昭和三二年京都大学文学部

東洋史学科を卒業以来、高等学校論として劇務に携わったから、中国古代史、とりわけ、秦漢時代の土地制度問題及び賦役制度の研究に取組んで来た。その成果は「東洋学」「歴史教育」などを通じて世に問われている。氏が対象としている分野は、史料の絶対量がほばきまっており、数少ない材料で独創的研究を発表するためには、総合的な時代性の把握と鋭い洞察力、分析力を必要とする、商賈の土地改革を論じた陌陌の研究や、人頭税「賦」に関する諸論文は、いずれもそうした困難を克服して生まれたものである。

書評



渡辺徹・飛鳥井雅道編『日本社会主義運動史論』

(A5判、三八〇頁、三一書房)

大正元年は、中国でいえば、ちょうど民国元年、中華民国の成立した年にあたる。このごろ、この民国初期のことをやっているときどき思うことは、この時期の日本と中国をどこかで横に切ってみるとすれば、はたしてどちらがすすんでいたのだろうか、ということである。むろん今さらすすんだ、おくれたなどナンセンスだ、といえはそれまでのことだし、なにを指標にとるかによってまったく異なってくるだろう。いまかりに「天下大乱」というようなものを指標にかんがえてみれば、いったいどういふことになるのか。ロシア革命、第一次世界大戦の終結から一九二〇年代にかけての時期

が、中国にとっても日本にとっても一つの「天下大乱」の時代であったことは否定できないが、問題はそれがどのような規模と深さで社会をおおい、そのなかでいかに革命の主体が形成されてきたか、ということであろう。

本書がテーマとしたのは、あたかもこの時期の社会主義運動であって、その発展と崩壊の過程が、各方面にわたりつつきわめて実証的に論じられている。実事求是の研究は、この分野の研究のこんごの発展にとって基礎となるものであろう。

このような問題をあつかうばあい、従来しばしばとられてきたのは、日本共産党と

いうプリズムをとおして社会運動を考察することであったが、本書ではむしろこれとは反対に、社会運動そのものの発展の法則性を、社会運動全体の視野でとらえつつ、社会運動の側から日本共産党をてらしだすという形をとっている。

またコミンテルンなど国際共産主義運動の影響を重視し、つねに国際的契機を考慮しつつ社会主義運動が論じられようとしていることも特徴的なことである。

ただ一読して感じるのは、本書が社会主義運動をテーマとしながら、運動そのものの叙述と分析よりも、むしろ運動の組織と理論により多くの関心がそがれていることである。そしてそれぞれの運動が当時においてもった限界性を指摘するとともにそれをのりこえる方向性が追求されるのだが、それが運動そのもののダイナミズムのなかで叙述されているのでないために、われわれしろうとの読者にとってはいささか退屈なものになってきている。つまり「天下大乱」のなかでコップのなかの嵐を見物するもどかしさを感じるのは、わたくしがあまりにこの時期の運動について無知であるためだろうか。

(小野 和子)

林屋辰三郎『古代中世芸術論』

(A5判、八二頁、日本思想史大系三卷、岩波書店)

昨年の秋、金沢で説話文学会の大会があった。大会の中心のテーマは「隠者と文学」で、日本中世の隠者的な生き方がどのような文学と結びついてゆくかが、種々の方面から論ぜられた。日本文学の研究者たちがこうした問題に現在どのような方法で迫まろうとしているかが知られて、私には有意義な学会であったのであるが、同時に日本の隠者(隠遁者)と中国の隠逸者たちがいかに性格の異なったものであるかということに気づかされた。

中国の隠逸者たちが現実には背く場合、彼らにとつての現実はいわゆる政治的なものであり、隠逸という行為自体が強烈な政治的行動であった。そして、これはきわめて資産階級的な視点ではあるが、芸術というもの、政治とそれへの政治的反抗の双方を「軽蔑」して、政治的尺度と直角に交わる方向に築かれるものとすれば、中国の隠逸者の行動はそのままでは芸術と交わるこ

とがなかった。精神的に最も現実を離れられそうな隠逸者ですら中国では、直接的には芸術的ではなかったのである。中国における芸術についての議論が、大まかに言って政治的有効性の主張かその裏がえしの主張という非芸術的な範囲を出ることがなかった(現在も出ていない)のも、深い根拠を持っていると言えよう。ところが日本では、隠遁という行為自体が、それだけできわめて芸術的なのである。

林屋先生の編まれたこの書物によって日本の「芸術論」とされるものをいくつか拾い読みしながら、それらの書物が、呪術と享楽との二つの極の緊張の上にそれぞれの位置を主張していると考えてみた。中国の「芸術論」が常に政治的であって芸術と交わることが少ないのに対し、この呪術から享楽にわたる座標は、わずかの角度の偏向でそのまま芸術的な座標になりそうである。しかしその座標系も、政治を「軽蔑」する

のではなく政治を知らぬだけのことだという点で、中国の議論になれた者には根本的な弱さを感じられることを否めない。

林屋先生は、この書物の最後に「古代中世の芸術思想」という解説を書かれ、縄文時代から芭蕉に至るまでの日本の芸術論の展開を概観されている。序説でも述べられるように「芸術の中にやどる思想性」といわゆる芸術論との間には大きな径庭があり、それぞれの芸術論を歴史的に位置づけることはきわめて困難であろう。それを「縄文的原形と弥生的原形」といった基準を援用され、輸入された「中国的ないし仏教的な美意識」の直接的な反映を尋ねて核となる思想をおさえられ、それが日本的にくずれてゆく(先生の言葉によれば「さかいをまぎらかしてゆく」過程の中に、日本の芸術思想の展開とその上につた芸術論のあり方を見えおられる。特に第二章後半の寄合という組織と文芸の動向との関係を論じられたあたりから、中世末期に芸能のジャンルをこえた芸術理念が成長してくることを述べられた部分までは、説得力を持った手がたい議論だと言えらるであらう。

芸術論という性格上、ここで述べられる

のは人々の生活から遠く離れた理論が中心となっている。しかし先生の『歌舞伎以前』の読者としては、「芸術の中に宿る思想性」の基盤となっている民衆層の動向をもう少し広く視野に入れた説明があればと思うのであるが、これは望蜀の願いである

山下正男『動物と西洋思想』

（新書判、一七六頁、中央公論社）

書評というのは大体、義理で書くものときまっているらしい。しかし、この本はわたしにとって、書評を、いやオマージュを書きたいと思わせる本だった。

読後感、なによりも生理的にもカタルシスをおぼえるといってはほめすぎか。ある人はこの本を博識と評した。たしかに、ギリシヤ語、ラテン語から、古代中国の『山海経』まで、いや、日本の民俗慣習までふんだんに引用され、論述が進められてゆく。博識というより博学というべきか。だが、わたしはもともと博識、博学はあまりこのまないたちの人間だ。「学」でメシを食っている以上、そうしたことはプロ

のかも知れない。

蛇足を加えれば、私が「芸術」という語を用いるとき、ひどく気恥かしい思いがするのであるが、先生の文章からはそうした気配は窺われない。あるいは世代の違いなのであろうか。

（小南 一郎）

の最低の義務であろうから。しかし、わたしは脱帽した。この博識は、実にクリヤーな論理によって、見事に統一した視点から裁かれ、整理されているのだ。

昔、われわれの間にはやった遊びがあった。二葉亭四迷描くところの「浮雲」で、お勢という、ほんの少しだけ「学」をつけた女が、情緒、いや本質の問題、この場合には恋愛が理解できず、常に決定的瞬間において、「アノ論理」といってはずべてをぶちこわしてしまう例を。「論理」を目の敵にしていたわたしたちは、およそ森羅万象を「論理」でかたずけてしまうのを拒否していたといえ、おかげさか。

だが、山下さんのこの本は、もはや皆さんお読みだと思うので内容の紹介はしないし、かつ、紹介してみたところで、実は本の帯に書いてあることに（但し、この帯の要約は内容をちゃんとつかんではないと思われる部分が一語一語にあるが、読者はおわかりであろう）つきかねまじいのでくりかえさないが、こうしたわたしたちの遊びの「論理」を、本物の「論理」でうちくदैてくれるのであった。ものごとをはっきり捕えるのは論理以外にないことを山下さんは証明した。

この本の「動物イメージによる西洋思想史」について、ある書評は、全部独創ではないかも知れないといった批評を、一知半解のままだしていた。笑談ではない。ある方の、いやあえていえば、同じ新書に入っている「肉食の思想」なる本はたしかにあるが、山下さんの論理の明晰さにくらべて、どんなにあいまいなことか。

気持ちのよい本だった。これだけ論理のクリヤーさが明瞭になれば、わたしはかつての「アノ論理」というクダラヌ遊びをやめて出直さねばならないと、つくづく思う。

（飛鳥井雅道）

川勝義雄『史学論集』

(A5判、四一六頁、中国文明選一二巻、朝日新聞社)

「シナ人の歴史は、何の判断も理屈もなしに、ただそれぞれの事実を、そのまま記録しているにすぎない」(ヘーゲル)。「(史記)以後一般に支那の史書は……近代にいたるまで……その間に政治的倫理的考察を加えたものにすぎない。固より世界史の理念も歴史の発展の思想もない」(下村寅太郎)。私たち中国史の門外漢でヨーロッパ学を専門にする者は、古来中国におびただしい史書のあることを知っているけれども、その史学に対する認識はほぼ右と同質のものである。ところが川勝さんは、中国には中国固有の歴史思想があり、また中国にはヨーロッパよりも古くから、すぐれた歴史思想と史学方法論の確立があった、という観点から、この『論集』を編んでいる。

選ばれた史論は、司馬遷『太史公自序』、杜預『春秋左氏伝序』、劉知幾『史通』、邵雍『皇極經世書』、章学誠『文史通義』の五篇。

それぞれに訳文と博引傍証で詳細な註釈が

付けられ、門外漢にも十分理解できるようになっている。杜預のいかにも歴史家らしい『春秋』に対する考証とその史書としての理解、劉知幾の凡俗史家に対する痛烈な批判、考証学偏重と理学偏重を排し、事実のうちにこそ理があるとする章学誠の歴史哲学など、それぞれ私にとって面白かったし、ヨーロッパで啓蒙時代に歴史の発展の思想が現われるまでは、むしろ中国にこそすぐれた史論があったという川勝さんの主張もうなずけた。それとともに、私にとって右の五篇の史論以上に興味深かったのは、川勝さんの「総説」である。そこには中国の歴史思想論が、中国の基本的な思想、哲学

にまで立ち入るスケールの大ききで展開されている。これまでわが国にどのような中国歴史思想論の論著があるか、私は知らないけれども、これはおそらくその分野での白眉の一つに数えられるだろう、と推測している。司馬遷が中国の精神史において占める位置は、ヨーロッパではヘロドトスにはなく、アリストテレスにこそ比せらるべきだという指摘などは、一般の歴史研究者の思いいたりえぬ卓見であろう。文章、論調ともに、口べたの川勝さんに似ず、大家の風を具えている。

なお最後に、邵雍『皇極經世書』の部分は三浦国雄君の筆になることを付記しておく。同じ研究機関にいる同僚に助力をえてこのような書物を編みうるのは、わが研究所の強みであることを思った次第である。

(中村賢二郎)

京都大学人類学研究会編『目で見える人類学』

(13×18cm、一六一頁、ナカニシヤ書店)

序文にあるように、この書は人類学の読

むテキストに平行する見るテキストとして

編集された。つまり人類学の図表集である。ただ全体をカード式にしたところは思いつきである。たしかにばらばらにして利用できるのは、図表というものの性格からいっても便利であるにちがいない。

ただ問題はこの図表集に平行すべき人類学のジャンルが、編者たちによってどんなものとして、とらえられているかである。

図表はどこまでもそれに対応するものだから、そのりんかくははじめの折り込みや、目次を見ればひと通りはわかる。いわゆる体質からはじまって言語、文明、社会、信仰というように。だがそれらのなかにとりあげられている項目をみると、わたしなぞが人類にとって重要な文化だと思うものが入っていない。たとえば金属技術、または車などといったものだ。この種の文化が編者たちのシステムから除去されている理由は、この書物では理解できぬ。中国先史があって、日本の先史がないことなども。そのためには編者たちの講義を聞くよりしかたがないかもしれぬ。

もっともこういうことをいいたしたら、きりがいいことはたしかだ。だから編者たちの大学の講義に対応する、最小限度の図

表集という意味に解したらいいだろう。また見るということに重点を置くならば、もっとも表現技術の研究があつてよい。レタリング、イラスト、活字の組合せなどは、まだまだ研究の余地があろう。むりにカードサイズにおしこめたために、マードックの分類表などは見づらいし、居住制の表示なども、工夫した印象的な活字のレイアウト

飛鳥井雅道『日本近代の出發』

(B6版、四〇五頁、塙書房)

六〇年安保の直前から七〇年安保直後にかけて執筆された、維新から日清戦争の前年までの二〇数年間を対象とする諸論考と、『近代文化の出发点一般についてのモデル論』たる付論二をおさめる。時に精粗のムラが目につく(たとえばキー・チームの定義、訳語の統一、文章の彫琢について)が、

「歴史のなかで生活意識をさぐる」という模索の軌跡たる力篇ぞろいである。

量的にいて三分の二以上を占める文学史的論考は、著者のかねてよりの、「自我の確立」論とは「別の視点から」、「政治小

トを使つてもいい。見る、見させるためには、やはれそれなりのデザインがいるのだから。

最後に世の書評風にひとつ。一〇三の二の織機図は転倒しているし、二、三は説明との対照番号が脱落。要注意。

(吉田 光邦)

説とそが日本近代文学の出发点である」との提唱とかかわるもので「近代初期」といったような「変革期」では「個人は集団に自発的にとけこ」み、「個人と集団がむすびつくところに『近代』は始まった」という視角で貫かれている。

文学にうとい評者にはただ面白く、批評などおこがましいが、個人と集団との関係はしかく簡単に割切れるものだろうか。

この疑問は、付論の一つ「近代文学における個人」(一九六二年執筆)の自称「粗末な結論」を一読すれば氷解する。著者は、

「どういふ革命的文学が（あえていえば社会主義への移行を日程にのぼせる文学が）どのようにして可能かを問いなお」す立脚点から、「むしろ、マルクスが夢にみ、フランス革命が集団的に描きだした集団的、共同的思考による疎外からの解放が、ブルジョワ社会というすべてが疎外条件に結びつく社会で、その社会自身からの解放とともに文学を豊かにするのであろう。そして、文学的には、……個人と集団を結びつけ、悪しき連鎖をたちきってゆくのは、真に意識化され、疎外にたちむかう個人としての方法である」とする。ひっきょう、著者のラジカルな初一念は、マルクスもめざした

荒井健 『杜牧』（『中国詩文選』一八卷）

（A5判、二六八頁、筑摩書房）

若いころ、ドイツ・ロマン派の文学に熱中した。ドイツ・ロマン派の文学そのものが、英仏にくらべて近代国家の形成が遅れたドイツにおける現実からの逃避であったように、それは、日中戦争から大東西戦争

「真の共同体」「革命的プロレタリアの共同体」への「出発」なのだ。

もしそうだとすれば、到達点が発発点によって、未来が過去（「近代初期」の「変革期」）によって、どれだけ先どりされていたろうか、というさらなる疑問もわくが、それはさておき「自我の確立」不十分で、それからあらぬか「全体意志」「一般意志」を分別しえぬままに、「共同体」に魅せられがち、との悔いのみ多い評者の自戒、そして老婆心として、「集団にとけこむ」「自発」性一般について、危惧をぬぐいきれぬことだけは書きとめておきたい。

（樋口 謹一）

また、わたしは『四季』の定期講読者であり、堀辰雄の愛読者であった。荒井さんの『杜牧』は、「離別の詩人」という一章からはじまる。

その冒頭に「実際、かれをさして中国にはまれな、青春の詩人ともよんでも決して不当ではあるまい。ただ、その青春の詩は常に、もはや帰らぬ時間への愛惜と同時に或る悔恨の情——いや悔恨というにはあまりに淡くはる苦い感情——をもって回顧された青春への弔詞であった。それゆえにかれは、青春の挽歌の歌い手とよぶのがよりいっそうふさわしい」と書かれている。

そこで、わたしは、まず、杜牧の詩に、否、荒井さんの『杜牧』に、ドイツ・ロマン派の文学や、『四季』の詩人たち、立原道造や津村信夫の詩を予想してしまったのである。

しかし、予想はまったく当らなかった。

荒井さんの筆によって描き出された杜牧の詩の世界は、ドイツ・ロマン派の世界とも、『四季』の世界ともちがっていた。もしもこれらの作品を青春の詩、愛惜と悔恨の情をもって回顧された青春の弔詞とよぼうとするならば、そこには、伸びゆく自己の魂

を見まもり育てようとした、限りなく懐かしい思い出が横溢していなければならぬとおもふのだが、そのような懐しさなど、まったく感じられなかった。

荒井さんの冒頭のことばにつられて最後まで読んでしまったわたしは、どうやら、甘口の酒だとおもって、辛口の酒を飲まされたてしまつて氣持である。青春とは、つねに、鬱積した汚らしい年令である。この

杜牧の詩のどこに、「鬱積した汚らしさ」があるというのか。「誇り高き士大夫の顔」を肯定してしまつては、青春の詩を理解することは、できないのではないだろうか。杜牧を「青春の詩人」とよぶ荒井さん自身の青春のためいきが、この本のどこから、わたしには聞えてこない。

(飯沼 二郎)

河野健二編『中国紀行30日』

(B6判、一八五頁、朝日新聞社)

さきごろ、ふと『中国史の時代区分』(岩波書店刊)をパラパラとめくって、いったい鄭伯賢氏らが来日し、學術講演をおこなった当時(一九五五年十二月)とくらべて、現在の文化交流はすんだのだらうか、とおもった。正直な感想として、わたしには、すすんだところか、おくれているとおもわれたのである。あれから二十年以上の歳月が経ったのであるが、まるで時計の針があともどりしたようだ。

こうした一種、時代閉塞的狀況を打破・打開しようとする空氣があったのであろう。人文研からそうそうたるメンバーが、中国の學術界を訪ねた。当時、採用が発令になつたばかりの私は、京都・東京を往復して、訪中のいきさつは知らず、報告会にも出席できなかったけれども、東方部の昂揚した空氣は感じた。そして、その空氣は座談会形式の本書のいたるところにあふれているようにおもふ。新しい消息もある

(わたしもべつのところで井上清先生發言の部分を引用させてもらった)。

明治からの日本人の中国紀行を、ばつばつと集め、読んでいるわたしとしては、その系列にも位置する本書を、これからも何度か読みかえすことだろう。ただ、人文研としては、本書のかたちで、世間一般にも報告した、日本と中国(限定して、學術上の)のつながりを、今後どのようにすすめるかという課題を担ったわけである。これは、たいへんなことである。

(竹内 実)

所員へのアンケート

「さいさんに読んで感銘をうけた本」

飛鳥井雅道『瑞山会編（坂崎斌執筆）』

『維新士佐勤王史』大正元年 富山房

飯沼 二郎『脇 圭平』『知識人と政治』岩波新書

菱沼達也『私の農学概論』農山漁村文化協会

会

上山 春平『宮崎市定』『九品官人法の研究』東洋史研究会

内井 惣七『Henry Sidgwick, *The Methods of Ethics*, 7th ed., 1907.

Everett W. Hall, "The Proof of Utility in Bentham and Mill," *Ethics*, Vol. 60, 1949.

小野 和子『ハンス・ライン』『悲傷の樹』

ミューダル『中国農村からの報告』

樺山 紘一『花田清輝』『室町小説集』

川勝 義雄『清・章学誠』『文史通義』

河野 健二『脇 圭平』『知識人と政治』岩波新書

小南 一郎『岩崎武夫』『さんせう太夫考』平凡社

竹内 実『田中謙二』『朱子語類』外任篇訳注 東洋史研究 二十八卷一号〜三十二卷二号

永田 英正『護 雅夫』『李陵』中公叢書

中村賢二郎『S・ヒューズ 生松・荒川訳』『意識と社会』

樋口 識一『高取正男』『仏教土著—その歴史と民俗』

藤枝 晃『山下正男』『動物と西欧思想』 NHKブックス

松原 正毅『コリン・ターンブル 幾野宏訳』『プリンジ・ヌガグ—食うものをくれ—』筑摩書房

三浦 国雄『アレキサンダー 池井望訳』『塔の思想』

三宅 一郎『東大社会科学研究所編』『基本的人権』 東大出版会

渡部 徹『『肅清と復権』チュコ共産党特別委員会報告 書 三一書房

林 巳奈夫『ナシ

樋口 識一『高取正男』『仏教土著—その歴史と民俗』

藤枝 晃『山下正男』『動物と西欧思想』 NHKブックス

松原 正毅『コリン・ターンブル 幾野宏訳』『プリンジ・ヌガグ—食うものをくれ—』筑摩書房

三浦 国雄『アレキサンダー 池井望訳』『塔の思想』

三宅 一郎『東大社会科学研究所編』『基本的人権』 東大出版会

渡部 徹『『肅清と復権』チュコ共産党特別委員会報告 書 三一書房

林 巳奈夫『ナシ

樋口 識一『高取正男』『仏教土著—その歴史と民俗』

藤枝 晃『山下正男』『動物と西欧思想』 NHKブックス

松原 正毅『コリン・ターンブル 幾野宏訳』『プリンジ・ヌガグ—食うものをくれ—』筑摩書房

三浦 国雄『アレキサンダー 池井望訳』『塔の思想』

三宅 一郎『東大社会科学研究所編』『基本的人権』 東大出版会

渡部 徹『『肅清と復権』チュコ共産党特別委員会報告 書 三一書房



五年目を迎えて

——漢代文物の研究班——

林 巳奈夫

この研究班のスタートしたのが一九七〇年、始め三カ年の予定であったのを二年延長して今年で五年目に入った。研究会は隔週であるが、前回までに六七回行われた。具体的な班研究活動については東方、人文両学報の彙報に記してあるからくり返さない。

前年度には班員各位に受け持っていたいただいた研究分担課題の研究成果を、最初の目標であった三年目にしめくくるという趣旨で、東方学報第四六冊に論文執筆をお願いした。いろいろの事情でこの度は間に合わなかった方も少くないが、最終的には八編が収載されることになった。中にはこういう性格の出版物でなければ到底掲載し

てもらえない資料集的な性格のものもある。また何編かは中国の古いことに関する学問に関心のある者なら誰しもがこれはなかなか、と感ずるに違いない労作である。限られた期限の中で御執筆いただいた方々に改めて感謝の意を表したい。

始め三カ年だった研究期間を五年に延長したのについては、中国において漢代文物の研究に極めて重要な考古学的発見が相次いだことが大きな契機となっている。その一つはよく知られる長沙馬王堆一号漢墓の発掘である。その正式発掘報告は去年から準備中と聞いていたが、この七月によりやく日本でも発売されるに至った。この発掘報告の刊行によって漢代文物の研究にもたらされる新知識は、或いは革命的なものがあるのではないかと想像していたが、大いに劃期的ではあっても革命的というほどではないようである。新しい発掘成果は今後ともどんどん出てくることは疑いないが、それを待ち望んで判断を保留しては研究の結果の公表を永遠の未来に遷延しなければならなくなるであろう。われわれが五カ年を通じ、共同研究によって獲得した漢代文物に関する知識は随分と広範かつ詳細なものである。五カ年の研究期限の終了をきりに、これを更に広範な研究者と共有のものにするため、適切な形でその公刊を目下計画である。

知識人ジョフレ・リュデル

——「知識人層と社会」——

樺山紘一

たとえば、吟遊詩人ジョフレ・リュデルは、ブライユの領主だった——と、十二世紀の『トゥルバドゥールたちの生涯』は、かいている。「かれは、アンティオキアからかえった、巡礼者の口から、トリポリ伯夫人の評判を耳にすると、みぬうちから、夫人に恋してしまった。」想いはたかまり、口をつくのは愛の詩ばかり。ついには、十字軍にくわり、はるかトリポリまできたったのである。さはいえ、なれぬ船旅、ついにふした瀕死の床。風のたよりにつたえきたいトリポリ伯夫人は、死の床へいそぎ、いまやはてなんとするリュデルを、両の腕のなかにだきとめた。かれは、この幸福な一瞬まで、この世の人でありえたことを、神に感謝して、息をひきとった、という。一一四七年、ときあたかも、熟したロマネスクの文化が、南欧に花ひらいていた。

詩人リュデルは、知識人とよべようか。近代社会科学は、たぶんそうは、みとめてくれそうにない。たしか

に、トゥルバドゥールは、わたしたちの世界での、知識人のイメージとは、ひどくずれているようだ。

とはいえしかし、これを知識社会学やら、現代風知識人論のアンガージュマン論やらの大ネタで、バサリとやられては、ひとたまりもない。そもそも、その社会にとって、なにが知識で、どれが知識人かは、そうひとすじなわけにはきめられまい。トゥルバドゥール、ジョフレ・リュデルは、あの十二世紀のロマネスクの時代にあつては、ひとつの、あるいは、もっともしたたかな、知識人ではないかとおもうのだ。

「知識人層と社会」と題する共同研究は、七三年四月に発足した。知識（人）と社会のかかわりについて、意外とわかっていないこと、意外な筋道でかんがえねばならないことを、つづいてみようとしている。洋の東西、古中近代をとわず。

十二世紀の知識人に、周知の哲学者アベラールをとりあげてみなかったのには、わけがある。かれが、あまりに近代うけしすぎるので、敬遠してみた、ということもある。いやそれよりはむしろ、リュデルのあの凡庸さを見こんでのことだ。なみはずれた無鉄砲をべつとすれば、かれはたいした才能をもつでもない、ごくふつうの

詩人にすぎない。いつの時代にも、知識人はだれもみな、詩人であれ、学者であれ、法律家であれ、宗教者であれ、なんであれ、文化史や学説史に名をとどろかすわけではない。ほとんどは、凡庸で平均的なひとりとして、くらしている。

とすれば、これは方法的必然である。かたいことばでいえば、社会層としての知識人の存在様式を問題にしたからだ。

もっとも、アベラールをすてて、リュデルをとるについては、いささかの個人的好みもあずかっている。アベラールにならって、はげしい抗争のけっか、男の一物をそぎ落とされるまでたたかうよりは、海をこえ、まだみぬ恋人のもとにはしるほうが、わたしには男らしい技とみえて、しかたないのだ。

「敦煌研究」専号第二の計画

——敦煌写本の研究——

藤 枝 晃

われわれが北朝期の敦煌写本、つまり最も早期の敦煌写本と取組む様になって、たてまえから言って四年とす

こし、実質的には六、七年を経過した。五年前にたてた計画では、今年の三月までに、敦煌写本中の北朝期の逸書、それは仏典の注釈書と戒律書とが大部分であるが、それを総ざらえ講読し編輯原稿を作り、今四九年度より『北朝期敦煌資料集成』と言ったものの刊行に着手することを考えていた。そのことは、私の健康上の理由からいくらか遅れはしたもの、予定にちかい線で進捗している。しかし敢てその刊行を来年以降に繰延べることとした。その理由の第一は、今に残るそれら北朝写本は、すべて偶然に残ったものばかりであるから、それを何とか組合わせて三巻か四巻かに仕分けるための合理的基準を見つけ難いことである。もともとバラバラのものだから、写本一点ごと数十頁のパンフレットにして何十冊かを出すというのも一方法だという意見も出ている。もう一つの理由は、かねての計画の通りに今年度に『資料集成』第一巻の刊行に踏切った場合、第一巻担当の一、二の班員だけが言語を絶する忙しさになるのに対し、他の班員は為すこともなく手を束ねていなければならないという事態を招く。これは、研究班の最後の一年年の過ぎ方として何とも不本意である。

以上の二つの理由から、一班員の提唱に従って、『東方学報』敦煌研究専号第二のためにこの一年を費すことにした。これならば、全員がそれぞれに全力を尽くすこ

となる。『資料集成』の方は、その後でゆっくりやって宜いではないか、ということになった。

さきの『東方学報』第三五冊「敦煌研究」専号を出してから、ちょうど十年たった。十年もつづけていれば、その間に進歩があるのは当り前のことではあるが、専号第二と銘うって出すからには、その間の研究方法上の進歩を旗じるしに掲げたい。さきの専号では、とくに仏典を扱った諸論文の場合、古写本を扱かいながら、古写本学的処理を怠ったものが大部分であったことが、何よりの不満であった。つまり、古写本を扱かうに際して、今日の印刷本と同じ眼でそれを扱かっていた。もっと具体的にいうと、写本に書かれた字を読むに止まって、書体や紙による年代判定をせず、また写本の性格（公的写本、私的写本）を見きめめないから、それから導き出されるべきもっと重要な諸問題——例えば学派の問題などを見ずしてしまふことになる。こんどの専号第二では、古写本を古写本学的に扱かうことを第一の目標におく。それをはっきりさせるために、前回の執筆者は前回と同じ主題について古写本処理法を駆使して新論文を書くことを私は提言したのであるが、それは担当の班員諸君が厭がって、それぞれに別の主題を見つけることになる模様である。

外国人研修員・研究員（昭和四十七・四八年）

研究員

何朋（日本学術振興会流動研究員）香港中文大學講師 中国

近代文学

Eise Gialm（本所研究員）デンマーク、オールフス大学講師

中国建築史

京都大学研修員

麦仲貴 香港中文大學新亞書院 中国哲学

Michael H. Finegun シカゴ大学 宋代の都市

Madajewicz K. Czyzewska ワルシャワ大学 宋代史

Richard E. Strassberg プリンストン大学『桃花扇』の研究

高美青 香港中文大學新亞書院 中日文化交渉史

Yves Marie Allieux パリ大学 日仏比較文学

盧瑋鑾 香港中文大學新亞書院 唐代文学

Jocher Kandel ヴェルグルク大学 公孫龍子の研究

Barbara Kandel 西独国立研究所研究員『太平経』の研究

Willem Jan Boot ライデン大学 日中思想史（江戸時代）の研究

研究

Christian Frederick Murck プリンストン大学 明代史

Blussé van Oud-Alblas ライデン大学 華僑の研究

Helwig Schmidt-Glintzer シェンヘン大学『弘明集』の研究

Colclutt Martin ハーバード大学 日本禅宗史

雲岡十八洞測量図仕末記

田 中 重 雄



雲岡調査は昭和十三年から本格的に開始された。隊員は皆二十才台後半から三十才台前半迄の若さであった。雲岡村は人口三五〇人ばかりの寒村、村人の一部は初め洞内に住んでいた。大同省の方から代替の住居を提供し村内への転住がなされた。先ず石窟の前の崩壊した前壁の堆積を取り除き一部発掘もした。これには北京留学中の日比野丈夫氏の来援を得た。写真と測量は殆んど丸彫りに近い彫像に溜った積年の土埃りの除去作業から初まった。私が参加した十七年には水野先生は十八洞を測って居られた。本尊を中心に

左右に大きな脇仏、その間に菩薩立像、空間には十大弟子（挿図）、供養天人の浮彫りが配されて初期に造成された曇曜五窟

の中でも最も華麗な洞である。

十九年の秋、原図の一部を残して皆が引き揚げてからも私は測量、製図を続け破損した建物の修理監督も兼ねる目的で現地に留まった。それより先、雲岡奉讃会が結成され、保存計画も練られていたのである。しかし日々に資材は入手難となり窓ガラスを求めて張家口に行き、折りから調査滞存中の藤枝晃氏を大境門外に訪ねたりした。二十年春より邦人は度々城外の部隊へ集結させられ訓練を受けた。八月十五日のニュースは省公署に在ってきいた。一旦石仏寺へ帰り、裕に一世帯以上の機材、装備品の類を処置した。原図は書きかけのケント紙と共に固く巻き込み、トランクに麻縄で厳重に縛り付けた。

旬日にして大同城外には広東の地方軍、五原地区の傅作儀軍、太原よりの閻錫山軍、それに共產軍も出沒して複雑な様相を呈したが、その力の均衡の上になつて折衝が重ねられ、独身男子には小銃が渡され、一般邦人を護り鉄路、太原經由で北京へ向うことに妥結した。装備は食料と衣類だけの軽装を要求され、トランクは最後に受け取れる約束のもとに後部車輦に積み込まれた。九月下旬、北京近郊の豊台に向つて引き揚げ貨物列車は千五百人の邦人を乗せて大同を出た。豊台までたどりつくのに結局二ヶ月かかったのだが、雁門関近くの寧武では雪がちらつき、駅に続く丘には赤い寒を付けた灌木が一面に生えていた。ここでは数日間、電信関係の女子挺身隊員の警備を命ぜられ、五、六十人乗った貨車の中で「まぐろ」を並べたように銃を抱いてゴロ寝した。この辺は一番危険な区間でもあった。鉄橋は爆破され乗り継ぐ為に渡河する傍に、どこからともなく飛

んで来る小銃弾が、小さな水しぶきを上げた。鉄道爆破にも会ひ死者も出た。太原で武装解除され、列車待ちの爲数週間泊まった。太原を出ると榆次の駅の直ぐ横を汾河の支流が流れている。河原で飯食炊爨する家族づれには、それなりの生活があり、その表情はそう暗いものではなかった。最も、がっくり来たのは独身男性ではなかったか。列車は予告なしに動き出し又止る。その度に何人か、とり残された。寿陽―陽泉―石家荘―保定と漸く豊台に迫り着いた。

豊台では待てども荷物は到着しなかった。引き取り有志が募られ十名余りと太原行の貨車に潜り込んだ。太原駅では引き込み線の貨車の横で偶然顔見しりの京都仏専出、蒙疆新聞の大森記者に出会い、荷物は既に没収され合作社に移された事を知った。合作社とは閻錫山側と日本人から成る軍費捻出の爲の経劑機関である。代表二名が引き取り方を交渉したが纏らず、私は原図の重要さを記し倉庫の点検を願ひ出た。きき入れられ私だけ倉庫に入る事を許された。大きな室に荷物は山積みされていた。外側に在った為、原図のトランクを見出すのに、そう時間はかからなかった。数日間を列車待ち、又北京行の超満員の客車に乗り込む事が出来た。その中を各勢力代表の日本人工作員が残留を勧誘しに来た。豊台では図を北京大学へ届ける名目で持ち出すことが出来た。小野勝年氏に会う可く東方文化北京出張所を訪ねた。うず高く積まれた漢籍の中で松崎鶴雄氏が只一人整理して居られた。小野氏の住所を知り訪ねたが不在、同居の鹿内氏に預けることが出来た。一旦豊台へ帰った。独身男子は強制労働の爲抑留され何時帰れるとも判らない、それを免

れるには書類の上で形式的に妻帯者にならねばならないとの事、どのこに頼もうかなと目星を付けて見たりしたが、それには及ばず翌正月には天津へ移動、二月京都へ帰ることが出来た。図は後に今西春秋氏に引き継がれ、最後に中国側に接收された。

三十年、水野博士が訪中団に加わり北京を訪れた時、公式レセプションの席上、郭沫若氏より原図は返還された。然し既に十八洞は出版され間に合わなかった。図は齧が伸され、各壁面毎にきれいな字でネームの付箋が付けられていた。復交も成り、雲岡石窟の捕遺として、今鋭意、墨を入れていく。

学問と日常生活

松 原 正 毅

文字情報をおもなメディアとして成立した学問体系は、当初から、自己増殖系を内包していた。文字情報のかたちで外在された知識は、つねに加速度的な累積効果をとまなう。その知識の累積体は、自己運動をはじめ、自己系内での検証と検索作業をつうじて、それ自身の権威を保証する。

古代社会に登場した文字は、権力を補強する重要な役割をに

なつた。シュメールにおける粘土板にかかれた経済文書、殷における甲骨にきざまれた祭祀文書などは、ある意味では、統治機構または官僚機構の独占物であつた。近代国家体制をとつた世界諸国は、いま、文書の洪水のなかに統治機構をくみだてている。これらの背後には、歴史をこえて、知識の累積体としての学問の存在をみてとることがづきるだろう。ある時点では、法体系、神学体系、また医学体系、技術体系などのかたちで統治機構を補完しているのだ。

ところで、共時的・通時的な面での人類の知識総量のなかで、学問または文字情報のかたちでできりとられている知識は、ごく部分的なものにしかすぎない。学問の対象として、未定着、手つかずのままでのこされている広大な領域が存在しているのだ。それは、日常生活そのものである。

日常的な生活状況のなかで継起してゆく諸現象、諸活動は、たいへん断片的なものにみえがちである。じつさい、そういう日常生活的な現象、活動は、相互的な脈絡をもたない断片的なものである可能性もかんがえられうる。人類学においては、ここに文化という媒介項をいれることによって、その断片を統合し、ひとつの全体像をえがくところをみる。しかし、これまで、このころみがかならずしもじゅうぶんな成果をおさめてきた、とはいいがたい。

じつは人類学にとどまらず、現在の学問体系は、日常生活現象を記述するための有効な方法論をもちあわせていない。たべ、しゃべり、つきあう、日常生活活動を、どのレベルで、どの単位で、どのような方法でとりだしうるのか。思想といい、

知的営為といい、ひっきょう、日常生活のなかからはぐくまれるものなのである。または、そういう営為の背景には、日常生活がつねにつきまといっているといいかえてもよい。

いわゆる無文字社会においても、オーラル・トラディションにもとづく知識の累積体の継承現象を、かずおおく観察することができる。これは、エスノ・サイエンス（民族科学）とよばれ、宗教、医学、芸術、博物学、哲学などはびろい領域をふくんでいる。文字情報を媒介としていないが、外在化され、継承される知識の累積体であることからいえば、まさに、これは学問である。しかも、エスノ・サイエンスは、おおくのばあい、ある文化をになうひとびとの日常生活にかかわる現象、活動を説明する、ひとつの説明原理のかたちをとっている。

いま、わたしたちは、わたしたち自身の日常生活をとらえなおす必要にせまられているのではないか。それは、日常生活原理の発見にもつながるだろう。日常生活を学問的にとりあつかうならば、あらたな生活学といった領域の開拓が要求されるのかもしれない。または、日常生活原理は、こういった学問の自己増殖系とははずれたところ、つまり学問の埒外のところでも捕捉される可能性もかんがえられる。

現在のところ、いずれの道をたどるかについて決定をくだしうるだけの材料を、もちあわせていない。模索中の段階なのである。

『維新土佐勤王史』のこと

飛鳥井 雅道

わたしはこのごろ、瑞山会編『維新土佐勤王史』（大正元年、富山房）を、常にページをめくっては読みかえている。最近感動した本という『人文』のアンケートに入れた由縁だが、大分前に勉強として読んだ時には、わかっていなかった執筆の動機、モチーフ、執筆者の怨念といったものが、ますますおもしろく、おそろくずつと座右の書としてわたしの中に生き続けるだろうと感じている。

題名どおり、武市瑞山を首領とする土佐勤王党を中心にすえた土佐派の維新史だが、長州を中心にした『防長回天史』全十二冊の持ち味とは、まったく性格を異にしているのである。『回天史』は、たしかに『勤王史』より、はるかに史料は豊富である。たとえば、いつごろから諸国の剣術書生たちが江戸へ遊学を許されるようになったか、といった小さな、しかし幕末史では重要な人の動きを考える史料として貴重な指摘が随所にちりばめられている。だが、長州のこの本、いかにも功なり名とげた長州顕彰録でありすぎる。史料はあるが、史観が平凡すぎるってはいいすぎか。

その点、わが『維新土佐勤王史』は、強烈な党派性につらぬかれていて、一つ一つの史料が生きてくる仕組みになっているのだ。瑞山会というからには、武市半平太が中心になっている、この瑞山自身を、わたしはあまり評価できないのだが、それは別の機会に譲ろう。ただ一月ほど前、土佐の瑞山の墓に詣でたとき、その横に右翼の新しい塔に黒々と「日本精神復興之地」の字が躍っていたといえは大方の御理解はいただけるだろう。

この本の真の問題はそこにはなかった。維新で土佐ほど多くの血を流しつつ、かつ肝心な場で、その犠牲がむくいられなかった国もめづらしい。功労は薩長に一人じめにされ、土佐はおいてきばりをくったのだが、その怨念は、民権運動として再び生れかわらねばならなかった。明治になっても多くの人材を獄に送り、死にすら追いやった情念は、半平太の切腹、龍馬の横死以来、たえることはなかったのだ。そしてこの『勤王史』だ。実際の執筆者、紫爛日坂峻賦は、土佐出身の民権家、かつて、明治十六年には、『汗血千里駒』なる決定版龍馬伝をものにした政治小説作者だった。

つまり『勤王史』は単なる史書ではない。維新と民権運動の怨念を大正元年まで貫ぬきとおした明治権力弾劾の史書であった。わたしはまたページをめくる。史書とはかくあるべきものかという個所にまたぶつかったが、それはわたしなりの龍馬伝にとりこんでゆきたいと思う。

旅

テキサス談

島田 虔次

昨年十二月、パリへ行ってきました。期間は一ヶ月。ドミエビル、ジュールネ、ソワミエ、ホルツマンなどの、いわゆるシナ学者の諸氏や、バスチド、ピアンコ、ベルジェール、シェノーなどの中国近代史の学者達に会っていろいろ話を聞きました。しかし今日では学問談でも観光談でも、パリの話など陳腐以外の何ものでもないのです、ここではむしろアメリカ談を申し上げたい。と申しますのは、パリでの日程を開始する前、一週間ほど、テキサス州のオースチンという町に滞在したからであります。ハーバード、コロンビアなど東北部とちがって、人文科学系の学者で、テキサスあたりを訪問した人はそれほど多くないかと思えます。オースチン訪問は、全く私の家庭的な理由からでありましたが、滞在中、毎日のようにテキサス・ユニバーシティ・アート・オ

ースチンの構内をうろつきました。オースチンという町はテキサス州の首府ですが、州で六番目の都市にすぎない。人口二十五万、そのうち四万人がこの大学の学生というのですから、全くの学園都市です。街はダウン・タウンが多少都会的に密集しているほかは、街じゅう、森の中にせいぜい三階建てまでの家屋が点在しているという感じで、日本の現状とひきくらべて、羨しいというよりなんだかバカバカしくなったくらいのものでした。大学は石油利権をもっているのだからハーバードについて金持だということですが、しかし、例の石油ショックで、廊下の電灯など一つおきに消したり、噴水を閉じたり、大いに努力しているようでありました。学生の主催する催物は、すべて市民にも開放されているそうです。おもしろいのは、どんなに有名な音楽家の場合でも、聴衆が多くて入り切らなかった場合は、何度でも聴衆の入れかえをして、同じ演奏を繰り返させるのだときました。

テキサス大学には日本・中国関係の特別の講座はなく、歴史学科の中で一つの単位として教えられているようで、その日本史の *Braided* という教授におめにかかりま

した。六十くらいの老先生で、もとはアメリカ海軍史の研究者、その方の著書もあるそうです。海軍史研究の必要から日本研究にすすみ、昭和三十年前後のころ人文にも来て、坂田教授や本山幸彦君のことをなつかしがっていました。必ずしも流暢ではないが大変よくわかる日本語をはなし、会話には殆んど不自由を感じませんでした。明六社に関する研究と資料翻訳を完成して、東京へ原稿を送ったと言っていました。アジア関係の書庫を見せてもらいましたが、わかい日本婦人の司書が一人、書物は戦後集めたものばかりのようで、それほど多くもない雑誌類の中に、我が研究所の人文学報が全部揃えられていたのは嬉しく思いました。中国関係は台湾の複製ものばかりが数百冊、これは *Asian Society* (C) とかからの配給品だということです。ブレーステッドさんの紹介で中国史の *Rhoads* 講師にも会いました。父親がアメリカ人、お母さんが広東の方だそうで、中国語は勿論よく出来ますが、ボキャブラリーが奇妙にかたよっているように感じました。どういふわけなのかよく分りません。御二人の案内でテキサス大学が誇る現代絵画(ほとんど

抽象画)の蒐集などを見ましたが、その外に金にまかせてキャサリン・マンズフィールドの遺稿やウィリアム・モリスの書物など、驚くべく沢山の欧米近現代文学の資料を蒐集しています。然しなんと言っても此処は、ラテンアメリカ文学の研究で有名なところというだけあって、その方面の古版本や版画などの収蔵は、素人目にも流石と

『人文』一〇号の辞

わが所報『人文』は本号を以て一〇号を数え、これからは二桁の台にのる。そして私はこの号限りで所報委員の任から解放されることになっている。何彼につけてお肩入れを頂いた所内所外の各位にこの機会に深甚な謝意を捧げたい。

今まで『人文』あるいはわれわれ委員に寄せられたいろいろの苦情ないし賞讃のことばの中で強く印象にのこるものが二つある。一つは同じ委員仲間の中村賢二郎君のことば「ほかの二人の委員が熱心すぎて近所迷惑の趣あり」(第二号「編集後記」)。もう一つは「当初はわれわれが『所報』の復刊を云々したときは、こんな立派なものを作るつもりで議論していたのじゃなかった」との某君のことば。

前者に関して中せば、せっかくの中村賢兄の忠告にも拘らず、今もってそのままであり毎号の相談や校正の都度、飯沼君とのケンカ

思われしました。一昨年中国で出版されたヒュームの『人間理解研究』の扉に、テキサス大学のエディシオンを底本とした、とありますから、哲学方面でも特色があるのかもしれませんが。そう云えば野田又夫教授のものによく出て来るハーツホーンという老形而上学者は、此処の教授であるはずです。日本人の学者や学生(全部で五〇名くら

を欠かさずつづけている。そしてこのケンカ負けても少しも口惜しくない所が妙である。

後者のことばについては少々のコメントが要りそうである。当初にたしか「所報復刊委員会」と言った委員会ができたとき、委員会の内からも外からも実行不可能な名論卓説が次々とび出した。どれもが旧『所報』のお座なり官報形式への反発に由来する。それをあれこれ値切った挙句に「官報に非ず、學術雑誌に非ず」との線が出て来て復刊の運びとなった。委員会での超理想主義的諸意見に正直に従っていたなら、とんでもないお化け所報ができるか、何とも動きがとれないで立消えになったかの何方かであったことと思う。復刊した所報が思いの外に好いものになったといけれども、右の「官報に非ず、學術雑誌に非ず」との線に、げんざいの所員諸氏の力量をかけ合わせれば、この程度の所報ができるのは、言わば当り前の話である。言うなれば、所報は研究所の陳列窓に当る。ひと目でなかみが判る様にした上に、小綺麗で洒

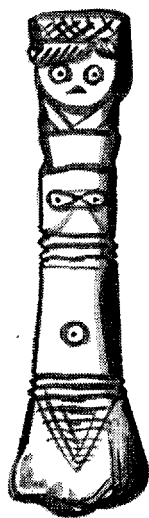
いの由)にも、理科系ばかり五、六人会いました。すべて東大の人で、それは偶然にそうであったのではなく、事実、京大の人は殆んど識らないと聞きました。中国人の留学生は五百人くらいいるそうで、成績上位は殆んど中国人で占められているとの話でした。

落ていたならなお宜しい。それが行過ぎて羊頭狗肉のそしりを受けるとすれば、所報委員としてはそれこそ本望である。反対に、なかみの割に陳列窓が見すばらしいということになれば、委員としては誠に申訳ない次第となるから、またまた中村君に言葉を返さねばならなくなる。何故このことにそんなにこだわるのかというと、いよいよこの号でおしまいだと思ったとたんに気がゆるんで、発刊が数か月も遅れたことを、私は大いに気にしているのである。

もう一言。所報への原稿執筆を割当てるとき、物々しい重大事の様に受取る方に時々出会う。われわれはそんな重大な文章を要求してはいないのだから。ここには、所員諸氏がふだんロビーや中庭、あるいは研究会の前後などに仲間どうしで交す会話をそのまま文章にしてほしいのである。そうした文章こそわれわれでなければ書けない文章であり、それを集めた所報がよそでどこでも作ることのできなない所報になるのだから。(藤校)

書いたもの一覽

一九七三年九月～一九七四年二月
(五十音順、◎は単行本)



会 田 雄 次

おとなの社会になることへの恐怖

ところ 一一月

見逃せぬ新聞の功罪

正論 一～三号 一一月～二月

飛鳥井 雅 道

書評・松沢弘陽『日本社会主義の思想』

日本読書新聞 九月一〇日号

篇胤のエネルギー(『日本思想大系五〇巻、月報』)

岩波書店 九月

幕末の動乱(『京都庶民生活史』所収)

京都信用金庫 九月

天皇制批判―文学の処方箋(『われらのうちなる天皇』所収)

大平出版社 九月

◎『日本近代の出版』

書評・荒畑寒村『平民社時代』

エコノミスト 一〇月二日号

文学 一一月

書評・色川大吉『新編・明治精神史』

飯 沼 二 郎

書評・ドナルド・キーン『生きている日本』

エコノミスト 一月二九日号
朝日ジャーナル 二月八日号

“The Introduction of American and European

Agricultural Science into Japan in the Meiji Era.”

in R. T. Shand (ed.), Technical Change in

Asian Agriculture, July 1973. Australian

University Press.

地力問題の根底に潜むもの

農業と経済 九月号

日本基督教団の「原罪」――総会問題によせて

教団新報 九月八日号

農業は自己回復の道をどこに求めるか(座談会・築地文太郎

日野水一郎) 地上 一〇月号

米減産政策のねらい

時事教養 六号 一〇月

書評・吉村昭『関東大震災』 エコノミスト 一〇月九日号

風土に適した多角経営を――食糧危機下の

日本農業のあり方——

用水と営農 一〇月号

私の朝鮮研究

まだん 一号 一〇月

「市民運動」京の夜びなこ(上中下)

思想の科学 一月号~一月号

韓国キリスト者のために祈る

福音と世界 十一月号

●国家権力とキリスト者

未来社 十二月

書評・A. Janata, E. Pauer & J. Kreiner, Zur

Geschichte des Pfluges (Kara-suki): Boden-

baugeräte Japans II, in *Archiv für Völkerkunde*

24, 1970, *Tools & Tillage*, Vol. II, No. 2,

1973.

先進国における農業の辿った道とわが国の農業

十二月

農業および園芸 一月号

整形手術は早いほうがいい

地上 一月号

農民を死に追いやるもの

中央公論 二月号

書評・石田雄『平和と変革の論理』

朝日ジャーナル 二月一日号

韓国キリスト者の行動に思う

共同通信系各紙 二月中旬

上山春平

伊勢神宮の神事と歴史

歴史と人物 一月号

深層文化論序説(『日本社会文化史講座』一卷) 講談社 一月

内井惣七

Higher Order Probabilities and Coherence.

Philosophy of Science, Vol. 40 (1973), No. 3.

Inductive Logic with Causal Modalities: A

Deterministic Approach, *Synthese*, Vol. 26 (1974),

No. 2.

梅棹忠夫

資源・エネルギー危機は新しい文明の契機となるか

(座談会)

ESP 二巻六号 九月

食事と文明(座談会)(石毛直道編『世界の食事文化』)

ドメス出版 九月

コミュニティ・バンクのありかた(座談会)(川添章・

柿田喜四夫編『コミュニティ・バンク論』)

鹿島出版会 九月

情報の経済性と非経済性(座談会)

季刊コミュニケーション 七号 九月

一〇〇年の人間群像(座談会)『日本人の一〇〇年』

(二〇巻)

世界文化社 一〇月

人の心と物の世界

中央公論 十二月

化政百五十年の展開(対談)(佐伯彰一編

『ふたつの日本』)

集英社 十二月

対談論(佐伯彰一編『ふたつの日本』)

集英社 十二月

●百科事典操縦法(共著)

平凡社 十二月

日本経済の文化的背景

東洋経済臨事増刊三七八〇号 金融と銀行 十二月

大学・高校・社会における人類学・民族学の教育と普及

コメントIV

季刊人類学 四巻四号 二月

関西経済と文化開発（座談会） 経済人 二八巻一号 一月

繁栄の虚像をふみ越えて（座談会） 東京新聞 一月

民族学と博物館 図書 二九三号 一月

ひと——人間を考える・二四（対談・藤岡喜愛） 放送朝日 二三五号 一月

日本の近代と文明史曲線（『もう一つの発想』） 吕平社 一月

いきる——生活を考える・一（座談会） 放送朝日 二三六号 二月

梅原 郁

青唐と馬と四川の茶 東方学報 四五号 九月

司馬光と王安石 歴史と人物 三巻一号 一月

愛宕 元

唐代の郷貢進士と郷貢明經 東方学報 四五号 九月

小野 和子

◎清代學術概論（訳注） 平凡社 一月

樺山 紘一

カタロニアの美の巨人たち 歴史と人物 一〇月号

カザルスのふるさと 東京新聞ほか 一月六日

中世異端思想の類型と段階（堀米庸三編『西洋中世世界の展開』） 東大出版会 一月

歴史のフックローをもとめて 歴史と人物 一二月号

書評・モラル『中世の刻印』

史学雑誌 二月号

川勝 義雄

◎史学論集（『中国文明選』一二巻） 朝日新聞社 一〇月

河野 健二

論壇時評 朝日新聞 九月二七・二八日、一〇月二九・三一日、十一月二九・三〇日、十二月二五・二六日

明治維新をどう規定するか（『日本の社会文化史』五巻） 講談社 一月二〇日

書評・大塚久雄編『後進資本主義の展開過程』 週間東洋経済 二月

熊倉 功夫

茶書つれづれ 淡交 二七巻九号～一二号 九～十二月

儀礼としての茶の湯 淡交 二八巻一号 一月

動揺する世相（『京都庶民生活史』） 京都信用金庫 九月

大名茶人・近代の数寄者達 別冊太陽 四号 九月

民芸と民族 春秋 二月

若衆の儀礼 能楽タイムス 二六三号 二月

小南 一郎

蘭亭論争をめぐる 書論 三号 一月

多田 道太郎

素顔と変身の魔術の間で 潮 一二月号

南総里見八大伝(『古典と現代』)

中央公論社 二月

◎(編著) 京都の記録 六卷『冬に住まう』

時事通信社 二月

田 中 重 雄

遼代多宝千仏石幢—実測仕上図(京都国立博物館編)

京都国立博物館 九月

田 中 謙 二

『朱子語類』外任篇 訳注五、六

東洋史研究 三三卷二、三号 九月、十二月

竹 内 実

荒尾精・九烈士・水(細道の中国・一〇)

伝統と現代 一二月号

中国文化大革命と日本人

中央公論 一月号

中国の孔子批判は周恩来批判か

中央公論 二月号

日中と日韓—近代日本の二つの顔

朝日新聞 一〇月二六日

永 田 英 正

居延漢簡にみる候官についての一試論—破城子出土の

史料 五六卷五号 九月

「詣官」簿を中心として—

東方学 四七輯 一月

狭 間 直 樹

一枚のピアと矢野仁二先生

龍溪 八号 十二月

林 巳奈夫

佩玉と綬—序説

東方学報 四五冊 九月

林 屋 辰三郎

『京都庶民生活史』序説

鹿島出版会 五月

京の家元(『京の家元』)

京都新聞社 九月

無形文化財の保護(『農村舞台と播州歌舞伎』)

神戸新聞社 九月

革命と歴史

人文 八号 九月

座談(河野健二編『中国紀行三〇日』)

朝日新聞社 九月

日本の神話(座談会)

京都新聞 九月

三条通—中京衆の道

コミュニティ 一〇号 一〇月

神官式年遷宮の史的意義

朝日新聞 一〇月

◎『古代中世芸術論』

岩波書店 一〇月

茶—真・行・草・破格

別冊太陽 十一月

古田織部の人間像

茶道雑誌 一月

風と流れと(町・膳・暦・徳・芸)

朝日新聞 一〇月二二日

樋 口 謹 一

紅もゆる攷

三高同窓会会報 四三号 十二月

日 比 野 丈 夫

新獲の唐代蒲昌府文書について

東方学報 四五冊 九月

人文研所蔵永楽大典零本解説(京大人文研景印本付録)

九月

知られざる京都、京都たべあるきコース(『新しい旅』

一卷『京都』)

世界文化社 一〇月

五台山の二つの元碑について(藤原弘道先生古稀記念史

学仏教学論集)

福 永 光 司

道教における鏡と剣—その思想の源流—

東方学報 四五冊 九月

道教一元論者の弁

人文 八号 九月

至大の世界への目ざめ—莊子の飛翔の哲学

The Executive 五号 一月

時を待つ東洋の思想

日本経済新聞 一月一八日

寒山詩と「白雲」(筑摩書房『世界古典文学全集』)

三六卷『禪家語録』(二月報)

二月

藤 枝 晃

敦煌曆日譜

東方学報 四五冊 九月

青白眼の構え

図書 二九〇号 一〇月

Chapter XIII "The Tun-huang Manuscripts" in

Essays on the Sources for Chinese History.

Canberra, Nov. 1973.

TDKカレンダー(監修・解説)

東京電気化学工業KK 一二月

A・F・P・フルスウェ、漢代における絹貿易の要因

(翻訳)

東方学 四七輯 一月

古 屋 哲 夫

●ファンシズムと戦争(共著・シンポジウム『日本の歴史』)

学生社 九月

松 原 正 毅

一二月

世界の常食・アンケート プナン族、パシトゥン族、トルコ族(石毛直道編『世界の食事文化』)

ドメス出版 九月

西サモア共和国—雨と馬と教会と、マーシャル諸島—

環礁の島々、ソシエテ諸島—楽園幻想(『文化誌・世界の国 オセアニア編』)

トルコの村から

講談社 一〇月

現代人類学の課題(梅棹忠夫編『人類学のすすめ』)

人文 九号 二月

筑摩書房 四月

三 浦 国 雄

皇極経世書(川勝義雄『史学論集』)

朝日新聞社 一〇月

三 宅 一 郎

SPSS (社会科学のための統計パッケージ) 概説(6)

京都大学大型計算機センター広報 六巻七号 九月

●社会科学のための統計パッケージ

東洋経済新報社 十一月

政党支持の動向と政治行動の変化

都市問題 六四巻一二号 一二月

SPSS (社会科学のための統計パッケージ) 概説(7)

京都大学大型計算機センター広報 六巻八号 二月

市民参加の国際比較研究(講演筆記)

名古屋大学大型計算機センター・ニュース 四巻六号 二月

京都市における市民意識(7) 法学論叢 九四巻二号 二月

山 下 正 男

●動物と西欧思想

科学思想のキー・ワードとしての外延

中央公論社 一月
現代数学 二月号

吉田光邦

食べものの科学

奥様手帳 一〇〜一二月号

古代の宇宙像

グラフィケーション 一二月号

道具の意味

こすもす 一二月号

教団発生の歴史と本質

歴史読本 一二月号

化学調味料私見

PHP 一二月号

序にかえて『京のきもの』

Chanoyu 一二月号

Coffee Culture

エクセクティブ 一二月号

古代中国の飛行器

窓 一二月号

日本の近代

チェンバー 一二月号

大阪の文化

技術と経済 一二月号

伝統技術の現代的意義

エクセル 一二月号

橋について

日本及日本人 一月号

職業倫理の回復

現代の眼 一月号

蘭学者の系譜

流動 一月号

長与専斎

きょうと 一月号

正月の茶

専門料理 一月号

陶磁器と食の世界

セラミックス 一月号

伝統産業と陶磁器

一月

器物の思想(『日本の文様器物』)

日本機械学会誌 二月号

東洋の機械と道具

新評 二月号

自動販売機

情報 二月号

モースの慨嘆(『日本の住まい』)

二月

明日の建築はどうなるか(『てい談』)

建築と社会 二月号

伝統と現代

オール関西 一、二月号

工芸史雑筆

日本美術工芸 一〇月号、二月号

対談(田辺聖子ほか)

料理手帖 一〇月号、二月号

横山俊夫

(翻訳)G・トットマン「阿部正弘と徳川斉昭、一八四四—一八五二年—徳川幕府における政治的和解—」

『日本の歴史と個性』上) ミネルヴァ書房 一二月

渡部 徹

渡部 徹

●部落問題の本質と解放運動の理論(改訂三版)

堺市教育委員会 一月

●部落問題・水平運動資料集成 第一巻(秋定嘉和と共編)

同和教育の今日的課題 三書房 一一月

部落の実態と「行政」 兵庫教育 二七二号 一一月

書評・鹿野政直「大正デモクラシーの底流」

週刊東洋経済 三七八二号 一月五、一二日合併号

書評・菊地昌典「ロシア革命と日本人」

週刊読書人 三月一、二日合併号

「同和对策審議会答申」中の史実誤認

部落解放研究 二号 二月

部落解放研究 二号 二月

人

文

第一〇号

昭和四九年九月一日

京都大学人文科学研究所 発行

明文舎 印刷

非売品